生涯学習情報誌
- フォンズ -
Fons
No. 90　2021年4月12日発行
常陸太田市フォンズ・ネットワーク事務局
常陸太田市生涯学習センター内
〒313-0061 茨城県常陸太田市中城町3280番地
TEL:0294(72)8888 / FAX:0294(72)8880
Webサイト:https://hitachiota-fons.jp/

大高洋服店　石橋 秀夫さん（東一町）

［取材］塩原 慶子

ある時代、ちょっとした町には必ずあった風景、オーダーメイドの紳士服のお店。ショーウィンドウに、仮縫いの背広や仕立てあがった見事な背広が飾られていたのを皆さんご覧になったことと思います。

洋服の概念が今は様変わりしてしまいましたが、背広といえば、一家を支える大黒柱の制服のようなもの。そのような背広などを仕立てる洋服店は、生活用品や食料品を扱うお店とは違って、なかなか店内に入る機会も少ないところでした。そんな洋服店の仕事場、職人さんの技術が披露される場を今回初めて取材でうかがうことができました。

「大高洋品店」という店名ですが、ご主人のお名前は石橋さん。店名の屋号は石橋さんのお父さんが就業なさっていたお店の暖簾分けのため。明治四十二年に石橋さんのお父さんが創業なさって、秀夫さんで二代目となります。

作業台の上にはいかにも切れ味のよさそうな大きなはさみが輝いていました。生地を裁ち、手仕事をする作業台の奥には、足踏みの音も懐かしいミシンが二台。足踏みミシンは一目縫いなど、細かなところが簡単にできるのでなかなか手放せないそうです。

特にイギリス製の背広地は高級品が多く、一着の背広を作るのに一週間から十日程かけて仕立てます。そのような大切な生地をあつかう石橋さんの指先は、今もしなやかでささくれひとつない美しい指先であることに気づきました。真綿や絹糸を扱ったことのある方ならお判りと思いますが、指先の荒れた手で朱子織等の布を扱うと、駄目にしてしまいますので、手先は特に気を使い、荒れないように水などはなるべく触れないようにしていたこともあったとか。

家庭・仕事・人生を支えるためにまとう服・背広の大切さを石橋さんの指先が象徴しているように見えました。

職人・企業の仕事場訪問
～大人の社会科見学

私たちの周りには多くのお店・企業があり、毎日忙しく営業をなさっています。ところが、そのお店や企業で、どのようなものが作られているか、その場面を目にすることはなかなかありません。職人の仕事場・企業の生産の現場を見てみたい、ものが生み出される大事な瞬間や、技術や工夫が積み上げられていく現場を見学してきました。

［取材］ 萩谷 浩司、塩原 慶子、篠崎 雅徳、鴨志田 弘子、武藤 卓

中屋恒五郎（栄町）

舛田（ますだ） 馨（かおる） さん

太田一高近くにある鋸に「恒五郎」の看板。見かけるたびに思ったのは、鋸が書いてあるからやはり鋸屋さんなのか？ そもそも鋸屋さんって？ 前から気になっていたその謎についてうかがってきました。

「恒五郎」はお店の方の名前ではなく、店主の方は舛田馨さん。お店は正しくは「中屋恒五郎」といいます。

「中屋」は鋸屋さんの屋号として多く使われており、修行を終えると中屋の名を名乗ることを許されるそうです。馨さんのおじいさんは元々お豆腐屋さんだったそうですが、お父さんが八十年ほど前に福島県いわき市に年季奉公に行って技術を教わり始めたそうです。

お客さんは大工さんが八割で、鋸の歯を砥ぐ目立てや鋸板のゆがみを直す修理やオリジナル鋸の製作も行っています。オリジナルの鋸も見せて頂きましたが、普段目にする物よりも板が肉厚で美しく手に取ると重厚感があります。完成までには様々な工程がありますが、その中でも刃のついていない板に道具で刃を打っていく作業、刃に角度をつける作業がとても難しくその精巧さはミリ単位との事。まるで何かで測ったかのように、きるために最適な角度、同じ深さで刃を作り板にゆがみがないように仕上げる。「この仕事は体で覚えるしかないよ」と笑っておっしゃっていましたが、作業場からもその長年の技術の積み重ねが伝わってきました。

坂爪指物店（春友町）

坂爪 行良 さん

太田市街から国道三四九号を里美方面に向かって北上していくと目に入る、ひときわ大きな工場、皆さんも「あぁ、みたことある！」と思われるでしょう。看板には「坂爪指物店」とあります。指物と言ってすぐわかる方は、年配の方が多いかもしれません。板を指し合わせて作られた家具などやその技法をいいます。たんす、火鉢、仏壇、障子など、身の回りに普通にあるものばかりです。日本の生活文化に深く根差している「木」、指物を作る指物師は木造建築を担う大工さんとともに、日本の伝統文化の支え手です。

お話をうかがった坂爪行良さんは、四代目。一歩工場に足を踏み入れると、大きな機械や材料が所狭しと、そして整然と並んでいます。ほのかに木の香りが漂う中、お話をうかがいました。「おじいさんの坂爪富五郎さんは職人肌の人でした。」「いい仕事を残したい、一生勉強ですね。」と言っていた富五郎さんの想いを引き継ぎ、「末永く使い続けてもらえる製品を作っていきたいと思います。」と行良さん。

伝統的な日本家屋が少なくなるのと歩みを合わせて、障子や建具に凝る家も少なくなり、写真のように手の込んだ障子を目にする機会も少なくなるのがとても残念に思えます。現在は商業施設、店舗、銀行、事務所などの一点物の什器（じゅうき）を製作しています。写真でご紹介できませんが、皆さんもきっとテレビで目にしたことのあるスタジオセットを四回も製作し、大変でしたが特別な経験をさせてもらえたそうです。

毎朝、仕事を始める前に祖父・富五郎さんが作った神棚に手を合わせます。機械だけでなく、道具も材料も整然と並べられた工場の中は、ある種の緊張感を醸し出しています。日本文化を担ってきた技術の伝承される場としての力が、職人さんや数々の道具から発せられているせいかもしれません。

神棚を見上げる坂爪さん

【プレゼント】
今回の取材で、坂爪指物店さまから木製からくり（写真）をいただきました。
抽選でフォンズ読者4名様にプレゼントいたします。ハガキに・お名前・郵便番号・ご住所・フォンズの感想をお書きの上ご応募ください。締め切り5月11日（火）です。
なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。
（宛先）〒313-0061　常陸太田市中城町3280番地
常陸太田市生涯学習センター内　フォンズ・ネットワーク事務局
「木製からくりプレゼント」

※ご応募いただいた個人情報は、当選者への発送等の目的達成に必要な範囲内で利用し、その他の目的での個人情報の利用は一切行いません。

アンティーク家具
ラフジュ工房（箕町）
岩間（いわま） 守（まもる） さん

工房の中に並ぶ様々なアンティークの家具。箪笥や机、テーブル、椅子など、一点一点持ち主も年代も作られた場所も違います。これらを修理して販売しているのが箕町にある「ラフジュ工房」です。

代表の岩間守さんがアンティークに興味を持ったのは、仕事を始め一人暮らしで部屋に和風の箪笥を置きたいと思ったのがきっかけでした。古物屋さんを巡り気に入った箪笥を見つけ思い切って購入。安い買い物ではなかったそうですが、良い買い物ができたと満足していました。

修理されて甦った家具

ところがある日、他の古物屋を訪れた時、自分が買った箪笥よりも状態がよくて安い箪笥を見つけて愕然としたそうです。当然ショックもありましたが、同時に「これは商売になるんじゃないか」と思った瞬間でした。

現在は修理、販売の他に使っていた家具のリメイクも受け付けているそうです。古い家具はもちろんその歴史が魅力ですが、それだけでなく現代の生活に合った家具としての実用性も大事にしたい。そしてその家具がまた使われることによって古い家具をこの世に残していきたい。それがアンティークに魅せられた岩間さんの想いなのです。

オリジナルの家具も製作しています
URL　https://www.rafuju.jp
電話　0294-70-3154（来店要予約）

（株）和工機型（きがた）（小沢町）
黒澤（くろさわ） 力男（りきお） さん

自動車や電車といった工業製品を作るのに最初の一歩目となる「型」と呼ばれる木型製品をご存知でしょうか？型はパーツを作るためにも必要となり、製品の元となるためその製作にも高い精度が必要となります。㈱和工機型ではその型を作っていると聞き代表の黒澤力男さんにお話をうかがってきました。

力男さんのお父さんが木型製造を始めたのは昭和十六年の頃。その後、昭和四十二年に力男さんが入社して木型だけでなく、ＦＲＰと呼ばれる繊維強化プラスチックでの型作りも始めました。現在ではＭＲＩ装置の型といった医療用の製品から、新幹線車両の車内部品、東京スカイツリーの通信機器のカバー、風力発電の風車のパーツなど普段目にするものから、太田でこんな物が！といった製品まで幅広く作ってきたそうです。今までで一番記憶に残っている製品をお聞きしたところ、一九八八年の埼玉博覧会で使われたリニアモーターカーの外壁部分の木型だとか。大きさにして三・五×三・五メートルの大型で三ヶ月ほどかかったそうです。

「この仕事の面白さは、新しい製品に取り組むときかな。作るものが一点一点違うしね。」と力男さん。ＰＣを利用した三次元で削る機械が導入されて、職人の技術に現代の先端技術も合わせた技でこれからも日本の工業を支えていくことでしょう。

MRIなど医療機器の木型

茨城リネンサプライ

（中城町）

伊村（いむら） 智安（ともやす） さん

太田の市街地を通っていると、突然ボートが掲げてある会社を目にしたことはないでしょうか？看板には「茨城リネンサプライ」の文字。リネンサプライの会社とは聞いたことあるけどなぜ船が？今回、中を見学させていただき、お話をうかがってきました。

「あの船は会社を訪れる方が見過ごさないための目印なんですよ。」と話してくれたのは会長の伊村智安さんです。なんでも以前は会社が分からなくて通り過ぎてしまった方がいたために、一目で分かり、伝えるときも「入口に船がある」と言えばわかるように設置したそうです。中城町にある工場は病院や介護施設で使われる白衣やマットレス、カーテンなどのリネンサプライ業務を行っていて、洗濯から乾燥までの流れはほぼ機械化が進んでいました。その一連の動きを見ていると正に工場といった様子です。

ここでもうひとつ気になっていたことを伺ってみました。それは「チョウザメ」の話。以前、リネンサプライの工場の中でチョウザメを飼っていると聞いたことがあったからです。伊村さんに聞いてみると、確かに岡田町の工場の中で飼育していたそうでした。岡田町にある工場ではリネンサプライ業務の他に、細かなゴミや菌などを持ち込まないクリーンルームが備えられ、精密製品の容器の洗浄といった不純物を限りなくゼロに近づける特殊な作業を行っています。それはこちらの工場が世界唯一との事でした。その洗浄に使う超純水を作る過程で出る水をチョウザメの飼育に使い再利用していたとか。しかし残念ながらそのチョウザメも東日本大震災の際に水槽にぶつかって死んでしまったそうです。

元々は太田市内で洋服などを扱う店舗から発展していった茨城リネンサプライ。太田の歴史も見てきた会社は、リネンサプライというわけではなく、世界レベルの技術を持っている凄い会社でした。

中城町東部工場

工場入口にある目印となる船

1991年ヘリコプターでクリストアンブレラ展に向かう途中、伊村さん自ら東部工場を上空から撮影

ちょっと ひといき

『イタリアンレストラン楽生流（ラウル）』

［取材］塩原 慶子

昨年三月、新型コロナウイルスで世の中が騒然としていたころ、常陸太田市中利員町に新しいレストランがオープンしました。飲食店が苦戦する中、順調にファンを増やしてきた「イタリアンレストラン楽生流」さん。県道六十二号とグリーンふるさとラインの交差点近くに店舗を建築中の頃から、「何ができるんだろう？」「新しい蕎麦屋さんかな？」と注目を集めていました。

もともとあった農家の施設をリノベーションした店内は、陽気なオーナーシェフ・ラウル・ピネダさんの笑顔とともに開放感あるレストランとなりました。

おすすめは何と言ってもピッツァとパスタ！カウンター内のピザ窯で作られた焼き立てピッツァは絶品です。三月二十一日に開店一周年を迎え、営業日も増える予定です。本場の味をぜひ♪三か月ごとに変わるランチメニューはお得感満載です。

住所／中利員町2975-2
電話／050-1136-7374
LUNCH 11:00-15:00
DINNER 17:00-21:00（L.O.20:00）
ディナーは予約制です。

常陸太田に縁のある若手芸術家の今をご紹介します。

茨城県北地域おこし協力隊

アーティスト 日坂（ひさか） 奈央（なお） さん

Part 2

［取材］塩原 慶子

西通りから、久昌寺や太田二高へ至る坂道の頂上にある「旧立甚」は、現在「メゾン・ケンポク」と呼び名を変えて、全国から応募して選ばれたアーティストさんが、そこに滞在しながら作品をつくったり、完成した作品の展示をしたりする場として利用されています。

メゾン・ケンポクの現在のレジデンスアーティストの一人、日坂奈央さんはまだ二十五歳。兵庫県加古川市生まれで子どもの頃から服が大好きでした。デザイナーを志望し、大学でファッションを学んだ日坂さんがなぜ茨城県北部の地に活動の場をもとめたのか？「干し芋＝茨城県」の印象と地元神戸とのアクセスの良さを利点ととらえ、地域おこし協力隊に応募しはるばる県北までやってきました。

アトリエで制作する様子

メゾン・ケンポクでの展示風景

こちらで知り合ったおばあちゃんたちにインタビューし、その人をイメージした洋服を制作、ご本人に着用してもらった様子やインタビューなどを紹介するフリーペーパーを三号発行しています。洋服はどれも驚くようなファッションですが、なぜか不思議とおばあちゃんにとてもよく似合っています。二〇二〇年春には、世の中がコロナウイルスで騒然となる中、一点物のアーティストマスクをたくさん作り上げていました。不思議なたたずまいのマスクを身に着けると、不思議と力が湧いてくる感じがしたのはなぜだったのだろう？

協力隊としての任期は三年間。この号が出るころには、次のステージを求め、どこかに向かって新しいステップを踏み出しているはずです。歩く道がすべてアートとして残る道を。

服を制作した日坂さん本人も着用

ご本人のイメージに合わせた服
（写真モデル・小林みよさん）

バーチャル曝涼撮影記

常陸太田ビデオ研究会
会長 黒羽 文男

去る10月17日から11月8日までの延べ4日間、常陸太田ビデオ研究会は市教育委員会の依頼を受けて、映像で楽しむ曝涼「バーチャル曝涼」の撮影を市内12か所で行いました。

この企画は、新型コロナウイルスの感染拡大で、令和2年度の集中曝涼が中止になった代替案として行われたものです。

初日の撮影は雨天の中を下利員町の西光寺から始まりました。集中曝涼開催時には茨城大学の学生による解説ボランティアを配置しており、今回も同学生が解説を行いました。撮影初日、私たちも緊張しましたが、学生たちは「解説内容を暗記してリポートするように」と担当教授から伝えられ、より一層の緊張で所々言葉に詰まることもあり、撮影時間が伸びてしまいました。そして最後の撮影をする頃には辺りも暗くなり、何度もやり直して完了するころには、疲労感もピークに達しているようでした。

撮影時、録画機材の不具合が発生しましたが、何とか予備の部品で対応し、撮影を乗り越えることができました。また、撮影は体力勝負です。重い機材を担いで長い階段を上ったり、機材への雨の侵入などを心配し、心身ともに疲れましたが、撮影最後に学生全員による「常陸太田大好き、曝涼に来てね！」の掛け声の撮影が上がった時は不思議と疲れが消えていました。

今回は四日間で延べ29人の学生が参加してくれました。資料の調査や解説文の作成、そして撮影と大変だったと思います。

この映像は編集後、常陸太田市のホームページや YouTube でも配信される予定だそうです。常陸太田には数多くの文化財があり、これらを徐々に映像で記録しながら世界へ発信できることを願っています。

太田一高 資料館（旧太田中学講堂）

中野冨士山古墳

思い出の絵本

『でこちゃん』

鈴木 真希（磯部町）

『にちようび　てこちゃんは　おかあさんにかみのけを　きってもらうところです。』

この絵本は、てこちゃんという女の子がお母さんに髪を切ってもらったら、おでこが丸出しになってしまい、家族に「でこちゃん」と呼ばれて、大笑いされてしまうお話です。大好きなおつかいに行って「かわいいね～」と褒められても、おでこのことをからかわれている気持ちになり、自分のおでこを大嫌いになってしまいます。

飼っている猫にアドバイスをもらったり、お兄ちゃんにマジックでおでこに目とまゆげを書かれたり、てこちゃんはもうおでこが気になって仕方がありません。ついに明日は幼稚園という日の夜、明日にはなおっている事を願って寝たのですが、朝起きて鏡を見るとそのままでした。『こんなおでこじゃようちえんに行きたくない』と泣いてしまいます。

泣いているてこちゃんを見たお姉ちゃんは、おまじないをかけてくれます。それは、てこちゃんにとって幼稚園に早く行きたくなるくらいのとっておきのおまじないでした。

幼い頃私も同じような経験をしました。思わずてこちゃんに「わかる！わかる！」と共感してしまう絵本です。私がこの本と出合ったのは小学一年生の時。初めて読書感想文を書いた本で、十年以上経った今でも忘れられない思い出の一冊になっています。てこちゃんがお姉ちゃんにかけてもらったおまじないとは…。続きはぜひ、読んでみてください。

ほっとひといき

『ヤマトオサムシダマシ』

佐々木 泰弘

この昆虫は「二〇一六年版茨城における絶滅のおそれのある野生生物動物編（二〇一六年度改訂版茨城県版レッドデータブック）」に準絶滅危慎種として掲載されています。しかし、絶滅危俱と言っても自然豊かな森の中に暮らしている昆虫ではありません。人家の納屋や軒下などで暮らしています。物質の流通に伴って分布を拡げていったものと考えられています。住宅環境や流通形態の変化とともに生息地が少なくなり希少種となってしまった様です。茨城県下で確実に確認されてきているのは常陸太田市のみです。ひょっとしたらあなたのお家でも出会えるかもしれません。

ヤマトオサムシダマシ
体長:2cm　撮影地:木崎一町

常陸太田の地名話 33

亀作（かめざく）『常陸太田市亀作町』

川松 博

世矢地区に亀作という興味深い地名がある。呼び名は、カメザクまたはカメサク。地名は地元の人の発音が一番正しいといわれるので、ここではカメザクになる。

亀作の地名由来について、『常陸太田市史 民俗編』で地名伝説として次のように述べている。

亀作町北西に亀形の塚のような一反歩ほどの畠と、その西に同じような形の九坪ほどの畠がある。大きい方を男亀（のぼり亀）、小さい方を女亀（くだり亀）とよんでいる。迷信に相違ないが、この土地を削り取ろうとすると、何かが起こるとされているので、割合に亀の原型をとどめているらしい。これらの亀に因んでこの平和なサトを亀作とよぶようになったという。長寿者の多いのもこのためであろうと古老たちは喜んでいる。

土地の形を動物の亀に見立て、その長寿に因んで瑞祥のことばを地名にしたか…。

ここの鎮守明世（あけせ）神社の本殿には、のぼり亀とくだり亀のすばらしい彫刻が飾ってある。

また一説に、サクは方言で山間地のことを意味しているという。『茨城県地名大辞典』亀作の地形から考えるとこのことも理にかなっているといえよう。

亀作町の鎮守明世神社

＜参考文献＞
『新編常陸国誌』『茨城県地名大辞典』
『常陸太田市史 民俗編』

※お詫び
第89号 常陸太田の地名話32 和田『常陸太田市徳田町』と記載されていましたが、正しくは、和田『常陸太田市和田町』の誤りです。訂正してお詫び申し上げます。

新太田点描 25

朱舜水

瑞龍山と云えば水戸徳川家の墓所のある場所として広く周知されている。

この墓地に、水戸徳川家とは全く血縁関係のない人が一人だけ埋葬されている。それが朱舜水である。

水戸徳川家二代藩主光圀公の配慮により、日本に縁者のいない朱舜水の死後を案じてのことだという。かつては墓石の前には「方円の池」が造られていた。これは舜水の言「水は方円の器に従う」からであるという。

朱舜水は明末清初の中国から日本へ数多く亡命した中国人のうちの一人で、この時水戸藩では舜水の他に、水戸祇園寺の開山となった曹洞宗寿昌派の僧東皐心越、医師の楊清友の三人を迎え入れている。このうち舜水と心越の系は一代限りで絶えているが清友の系は現在に続いている。

朱舜水は明国浙江省余姚の生まれで儒学者として著名であったが明国滅亡期の混乱を避けて日本へ渡来し長崎にいた。

これを知った光圀公は賓師としての礼を尽くして水戸藩に迎え入れた。江戸に来た舜水は水戸徳川家の駒込別邸に移り住み、ここでその生涯を終えているが、この間に設計・造園したのが今に一部が残る小石川後楽園である。

かつては庭園入口の唐門に舜水筆の「**後樂園**」の木彫篇額が掲げられていたが、戦災で焼失してしまった。焼失前に採拓されたものを下段に載せて置く。

また舜水は光圀公の依頼で安積覚兵衛（澹泊）を門人として育成している。澹泊は水戸藩の一大事業となった大日本史の編纂では中心的な役割を果たし、水戸藩の好学の基を形成している。

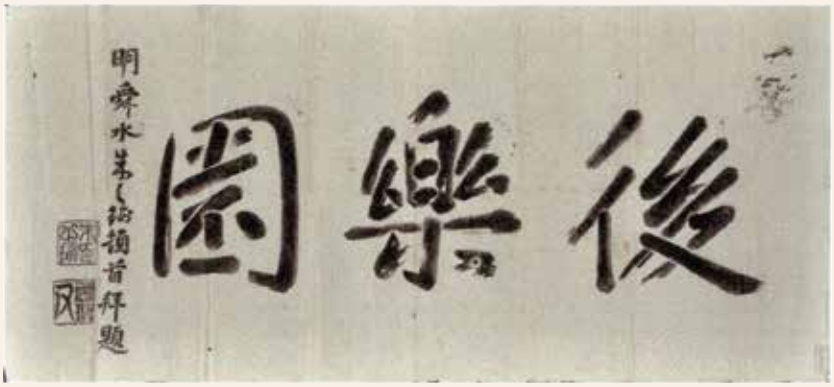
ところで左に掲げた朱舜水の肖像画であるが、江戸時代中期ごろの模写であって原本は水戸徳川家に所蔵されている。原本は戦前の展示目録や図録などに所載されているが、戦後の各種展覧会等の展示では確認されていない。

〈チョット一言〉

朱舜水が取り持つ縁で常陸太田市は中国余姚市と友好都市を結び各種の交流事業をおこなっているが、常陸太田郷土資料館所蔵品の中で朱舜水関係のものが、工芸品の『立原杏所筆朱舜水像』（原本は茨城県立歴史館所蔵）だけというのは少し貧弱に過ぎるような気がするのは筆者の思い過ごしであろうか。

（吉成英文）

（ひたちなか市　大山富彌氏所蔵）



（ひたちなか市　大山富彌氏所蔵）